

「第一〇回日韓神学者学術会議」報告

節目の会議を終えて

聖学院大学学長 清水正之

日韓神学者学術会議を二〇二二年十一月十一日、無事開催できたことを喜びとともに、ここに報告します。来日された韓国長老会神学大学校の皆さんには、日本に、そして聖学院大学へようこそ、と心からの歓迎の挨拶を、申し上げますことができました。

本来私たちは、三年前にここ聖学院大学で、会議を開催する予定でした。

両大学の交流は、今年で第十回目の日韓神学者学術会議となります。この会議は、二〇〇八年に締結された両大学の学術交流「神学者学術会議」協定に基づいて毎年開催される会議です。隔年でそれぞれのキャンパスで開催するという協定の趣旨で、十回目は聖学院大学が会場となる予定でした。しかし、十回目という節目を、COVID-19（新型コロナウイルス）のため、二年開催できず、今年ようやく開催することができた次第です。この記念すべき、十回目という節目の会議を無事に迎えられたことをともに喜びたく思います。

私自身は八年前からこの会議に関わり、多くの思い出ふかい教授の皆さん、また出来事にであいました。二〇一五年

の秋ソウルで、両大学のかかわりの歴史を、当時の学長金明容（キム・ミョンヨン）教授からうかがったこともその一つです。韓国長老会神学大学校がなぜ日本の聖学院大学を交流の相手にしたかについて、その背景をうかがいました。また二〇一九年、元基督教思想文化研究院基督教思想研究部長尹哲昊（ユン・ Cholho）教授からは、両大学教員の関係はいまや「莫逆の友（心の隔てのない友）」となったという言葉をいただきました。相互に腹藏なく語れるこの場に感謝します。

ひとつ申し述べます。金元総長のお話でもふれられ、本交流のはじまりとその後の発展に重要な役割を演じた、我が学院の名誉理事長大木英夫先生が、二〇二二年十月十二日、天に召されました。また、九回目の韓国での会議に出席した元総合研究所所長の高橋義文総合研究所名誉教授は、二〇二一年の八月二十九日に天に召されました。お二人の魂の平安をお祈りします。

この間の災禍は私たちに多くの宿題を残しました。この問いに答えるためには、なおすこし時間が必要でしょう。会議の主題は、三年前の第九回会議をうけ、「人間…アジアの人間観と神学的人間論——21世紀における人間性回復のための統全的収斂（2）」となります。この主題のもと、両大学が手を携えてアジアのあらたな神学の樹立をめざそうとするものです。

新型コロナウイルス禍にかぎりません。日本の自然災害、韓国の事故災害、世界に目を転ずれば、戦争の惨禍が現存します。在るべき人間の姿が歪み分裂しかねない契機に満ちています。私たちがめざすべき完全なる信仰と人間の姿が、バラバラにされるかのようで、生活の基盤自体が崩れ去るような恐れをいだきます。神学が、神と人間との統合をめざすものならば、まさに統全的人間の姿が問われるのであり、統全的という意味があらためて重要になります。

まだまだ時間がかかるでしょうが、神学的基礎の上になつた人間的解決のために、ささやかですが、この神学者学術会議がその一歩となることを心から祈ります。

日韓神学者学術会議のメインとなるシンポジウムは、二〇二二年十一月十一日、聖学院大学教授会室にて、村瀬天出夫准教授の司会、白正換（日本キリスト教団用賀教会牧師）の同時通訳で開始されました。学長清水正之、長老会神学大学院院長・キリスト教思想研究部部长申玉秀教授の挨拶が冒頭でなされました。

また十回目という節目であることから、ナグネ聖学院大学総合研究所特任教授より「日韓神学者学術会議（二〇〇九―二〇一九）をふりかえって」という時宜に合った冒頭発表がなされ、一同この会議の歴史的な経緯とこの歴史を支えてくださった諸先輩に思いを馳せ、あらためて感謝するよき機会となりました。

今回の発表者とコメントーターは以下の通りです。

講演…片柳榮一（聖学院大学大学院客員教授）

『もののあわれ』の近代日本における変異

——三島由紀夫の場合への批判的神学的視点

コメント…安 允基（長老会神学大学院副教授）

講演…金 永元（長老会神学大学校助教授）

北森嘉蔵の『神の痛みの神学』に表れた神学的人間論に対する批判的考察

コメント…島田由紀（青山大学専門職大学院准教授）

それぞれの講演・コメントのあと、会場との質疑応答となりましたが、五十名を超える方の参加する活発なものでし

た。

片柳教授の日本人の精神史をふりかえるとともに、アウグスティヌス、キルケゴールと西洋哲学に広くわたる議論は、その詳細はご自身の論稿にゆだねますが、仏教的諦念を背景に、無常を諦めとうけとめ「もののあはれ」（本居宣長）で決定的な文学的表現をえた「滅びの美学」を、まさに体现した三島由起夫の内在的理解と批判を論の起点にするものでした。三島はキルケゴールの倫理的決断も宗教的決断も拒否し、「あれもこれも」の美的決断、すなわちデカダンスをえらびとり、愛を愛する愛へと耽溺したとします。対比されるアウグスティヌスは、近代的デカダンに通じるものをもちつつ、深い自己の「内から」「他なるもの」への、すなわち神への超越をはたしたのだと。

金永元助教の講演は、ある時代を表す情緒、たとえば「悲しみや痛み」の分析は、その時代の人間の存在論的・認識論的核心を把握するための優れた方法の一つであろうという視点から、北森嘉蔵『神の痛みの神学』を内在的に理解し、分析したものです。北森神学の土台は「キリスト論」「三位一体論」でなく「人間の苦しみの実存であり、より特定するならば日本の苦しみの実存」であつたと指摘されます。神の痛みには日本の痛みは反映しているがアジアの痛みの苦しみが反映していないとする批判に金永元助教は賛同しつつ、さらに北森のヘーゲル批判等の問題点を指摘し、あわせてそれを超えた方向をもって北森神学を位置づけようとしています。北森神学の基礎と焦点は、人間論、すなわち「自然と悲しみを感じて表す『もののあはれ』を強調する日本的審美主義にある」とされます。神の痛みと人間の痛みを結ぶものは「類比」とそこからくる「痛みの象徴化」です。今日状況のなかで、日本の人間理解を土台とした世界の痛みに仕える可能性を北森神学はもつことは認めつつ、あわせて私たちの抵抗や正義に基づく行為が、あるいは神の痛みが、「私たちの痛みを癒やす媒介であり、類比であり、象徴であり得るといふ洞察」すなわち神義論こそ、「神の痛みの神学」の「人間論」がアジアだけでなく世界の痛みに仕える実践的神学的人間論となりうるのではないかと結論を述べられました。

それぞれの講演に対する対論者の発表は、講演者の趣意を正しくとらえつつ、異なる見方を提示する建設的なものでした。

終わりに、感想を述べます。講演とコメント、会場からの質問をあわせて、これまでの学会会議よりひとつ質の高い議論ができたと感じました。一言でいえば、この第十回目で、はじめて「情」「感性」を媒介にした両大学の接点があったということです。文学や芸術作品等をも通して、解釈学的にいわば内在的でないし下からの方法をとることこそが東アジアの相互の内在的人間理解を広げるものではないか、と私はつねづね考えてきました。今回の二つの講演でいえば、片柳教授の提起された日本的耽美主義ないし感性、金永元教授の日本的審美主義の指摘。両国がそれぞれの感情、感性まで降り立って向き合うことは、アジアの神学、人間学をもうひとつ普遍につなげていく、一つの重要なルートではないか、道ではないか。そう感じさせる会議であつたと感じました。北森嘉蔵はその『神の痛みの神学』のなかで、神の痛みは日本という「一国の真理」ではない、日本を媒介としなければ現実とならなかつたと述べ、真の Menschenkenner は Gotteskenner にはかならないといっています。 Menschenkenner (人間をよく知る者)、この「人間」は普遍的な意味での人間です。今年以降はこの会議の開催形態も少し変わることとなりますが、十回目にして、両大学の交流はもうひとつ新たな次元に踏み込んだ、と確信をもっています。

実務の準備をはじめ、周到な運営を助力してくださったナグネ総合研究所特任教授、菊池美紀マネージャー（研究支援課）、金子ゆかり職員（同）には心より感謝を申し上げます。次回は、二〇二四年にソウルで開催の予定です。